

4.2 よりよく子どもを理解するために（教育相談での活用） － ADHD と診断されている小4男子（Aくん）の事例から－

山形県立上山高等養護学校 齊藤博之

1 ICF 活用の経緯と実際

(1) 「こまった子」Aくんとのお会い

その学校は窓という窓が大きく、太陽の光をいっぱいに取り込んでいて、あたたかく明るい感じがしました。Aくんがいる二階の教室に行くと、25人編制のクラスからにぎやかな声が聞こえてきました。しかし、その印象は元気がよいというよりも落ち着きがない状態といった方がよいでしょう。オープンスペースの教室はそのまま広い廊下につながっていました。廊下から授業の様子を見せてもらおうと、先生が話す言葉一つひとつに呼応するように大きな声を出している男の子がいました。その子がAくんだったのです。そして、授業が始まって10分ほど経った頃、Aくんは突然立ち上がると廊下の一番端にある読書スペースに走っていきました。わたしを案内してくれた校長先生が「いつもあの調子です。今日はあれでも落ち着いている方なんです。担任の先生もそうですが、わたしたちも困っているんです。」と苦笑いしておられました。

(2) ICF 関連図を使った話し合い

わたしは気づいたことを付箋紙に書き留めながらAくんの様子を見ていました。そして、事前に電話で聞いていた情報などを書き入れたICF関連図（子ども理解シート）（図1）に貼り、午後の支援会議に参加しました。電話では、[集中力がなく、一斉授業に参加するのが難しい]ことや[全校集会や学校行事に参加することが難しい]こと、[友達とトラブルを起こす]こと、[両親があまり協力的ではない]ことが挙げられていました。そのことも含め、ICF関連図に貼られた付箋紙の項目を一つひとつ読みながらAくんの状態について確かめました。[友達とトラブルを起こす]ことが、感情をうまくコントロールできないことに影響を受けていることや、「本当は友達となかよくしたい」と作文に書いていることから、Aくんの乱暴な言動が”わざと”ではないこと、15分ぐらいなら集中できること、お母さんがAくんを育てにくい子だと感じていること、「計算ができるようになりたい」と目標を立てていること、などを確かめました。すると、その場にいた校長先生から「ああ、Aくんが悪かったわけじゃないんですね！」という感想とも驚きともつかないことばが飛び出しました。そのあと、わたしは「Aくんは普段、このような状態に対してどんな想いで過ごしているんでしょうか」と質問しました。口癖のように言っていることばやそのことばが出てしまう心の奥にまで想いを馳せました。

そのあとの「じゃあ、このようなAくんのつぶやきがどんなふうになるといいでしょう？」というわたしの質問を皮切りにして、ICF関連図（目標と指導・支援シート）（図2）を使って、目標と指導・支援について検討しました。目標や新しいつぶやきは黄色い付箋紙に、指導・支援については緑色の付箋紙に書き込み、次々に貼っていきました。特にAくんの15分間の集中力を十分に発揮させるため、授業の流れを構造化し視覚的に示したり、45分授業を例えば10分ごとの小さなユニットにして活動させたりする支援が大切であることなどを具体的な方法を示しな

がら確かめました。

このような「Aくんのどこが悪いのか」「何が問題であるのか」ではなく、「Aくんの生活・学習のしにくさを改善するために何ができるか」、また、「落ち込んでしまった想いをどう高めることができるか」という視点の話し合いは、とても前向きで明るく元気が出てくるものでした。

(3) 指導と支援を区別する

数日後、Aくんの学校から落ち着いて生活しているAくんの様子を知らせる電話がありました。後日訪問した際もAくんは落ち着いて授業に取り組んでいました。クラスの雰囲気も穏やかになったと感じました。しかし、その日の午後、「オレだってわかってるよー！」と泣き叫びながら廊下を走るAくんとすれ違いました。午後の全校集会への参加について担任の先生と話しているうちに突然飛び出したのだそうです。

このことは、教育現場で「指導」と「支援」を区別することの重要性を表していると考えます。ひとくちに「支援」と言いますが、わたしたちが支援する対象はその子の「発達」です。発達に必要な学習が円滑に行われるよう、環境調整をして「できる状況」をつくったり（狭義の支援）、子どもに力が付くように、また、力が伸びるように教えたり（指導）することが必要だと考えます。Aくんの場合、授業に気持ちを切り替えるために廊下と教室の間にパーテーションを置くことや、授業の流れを構造化し視覚的に提示すること、一単位時間の授業を短い時間の活動で組み立てるようにすることなどは、Aくんがよりよく授業に参加するための支援です。しかし、ストレスと向き合ったAくんがどのように対処するかということは環境を調整するだけでなく、ソーシャル・スキルやストレス・コーピングなどについて指導しなければ身に付かないことです。

(4) 子どもの「想い」に寄り添う

Aくんのほかにも多数の相談にかかわってきました。わたしにとって心強い味方になったのがICFの枠組みです。ほとんどの事例で「この子が悪かったわけじゃないんだ。」「診断することが大事だと思っていた。」「障害児だと決めつけて、仕方ないことだと諦めていた。」「……という感想が聞かれました。このことは、様々な問題を子どもに見るのではなく、環境との相互作用の中で捉えようとするICFの特徴を活かして子どもを捉え直した結果であると思われます。よりよい支援を実現するには、より適切な『子ども理解』が大切です。何か問題があり解決が見られなかったりすると、「もしかして、障害があるのではないか」と考えたり、「診断名がつかないと支援の対象にならない」と考えたりする傾向を感じるがありますが、子どもの「生活機能」を中心にみていくと、必ずしも障害（従来で言う障害：自閉症、ADHDなどの診断された障害名）が重要なのではなく、子どもの生活のしにくさを中心に理解しようとするのが重要であることがわかります。例えば、多動の傾向があり、衝動的な行動から人間関係上のトラブルを起こしてしまいがちというような問題を抱えている子どもの場合、学校現場にいる我々にとって、「この子がADHDかどうかをどうやって判断するか」は二の次です。だからといって「この子はADHDに違いない」と判断し支援にあたるのがよいわけでもありません。この子の「参加」（集団の中での状況）や「活動」（生活や学習場面での能力および実行状況）の様子、「心身機能・身体構造」に関する状況、「環境因子」（クラスメイトや家族など）を関連的に把握し、学習や生活のしにくさを総合的に理解することが適切な支援の第一歩であると感じます。そしてこのとき、現状をどのように感じているか、どんな希望を抱いているのかという「想い」に寄り添うという

ことも大切なことです。ICFには示されていませんが、わたしがICF関連図に「想い：主体・主観」の枠を設けているのは、これまでの実践からその重要性を実感しているからです。

2 成果と課題及び今後の期待

ICF関連図をつくることで、子どもを取り巻く状況や状態像を多面的に総合的に捉えることができ、何を問題として取り上げるか、解決する問題の優先順位は何かということが理解しやすくなりました。また、子どもの状態像を示す一つひとつの事象が関連的につかめると、「ある事象が改善されるとそれに関連する事柄も改善されるであろう」という仮説が立てられ、指導の経過に伴って得られる指導上の成果が予測できるようになりました。さらに、実現したい「参加」のイメージを目標にすることで長期的な視点をもつことが可能になり、段階的な課題解決が計画しやすくなりました。そして、これらの過程を関係者が共有することで、「誰が」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」関わることができるかということを確認しやすくなりました。また、その際、ICFが標準的な共通言語であるという特徴からさまざまな職種の関係者が集まっても話がしやすいと考えられます。そして、ICFの枠組みや項目を活用することで、よりスピーディに子どもの状況の全体像を把握できるようになりました。

その反面、ICFの理念や項目の意味がわかっていないと関連図の作成に手間がかかりすぎたり、「何が悪いのか」といった側面が強調されたりするという課題があるのも事実です。

ICFを活用した教育相談における成果と、今後、期待されることを以下に挙げます。

- ① 子どもの全体像がつかみやすくなる。
- ② 長期的な考え方ができる。
- ③ 世界標準であるため多職種間の連携がしやすくなる。
- ④ 協働して人生を創ることができる。

3 おわりに

どの子どもひとりの人間としてかけがえのない人生を創っていく存在です。ICFは障害のある人だけにに関する分類ではなく、すべての人に関する分類であると言われます。ICFにはその人の主観的な部分は扱われていませんが、人が人として生きる全体像を示してくれるものです。使い方によっては積極的に人生を創っていくための有効なツールになり得るものと感じています。

今、わたしたちに何ができるのか……。わたしたちの豊かな想像力でICF関連図という願いの予想図を描き、専門的な知識や技能という具体的な技を使って、願いの世界を現実のものへと創造していく。ICFにはそのような可能性があると感じています。

氏名 A くん の ICF 関連図
 作成日 2005年 〇 月 〇〇 日
 作成者 齊藤博之ほか

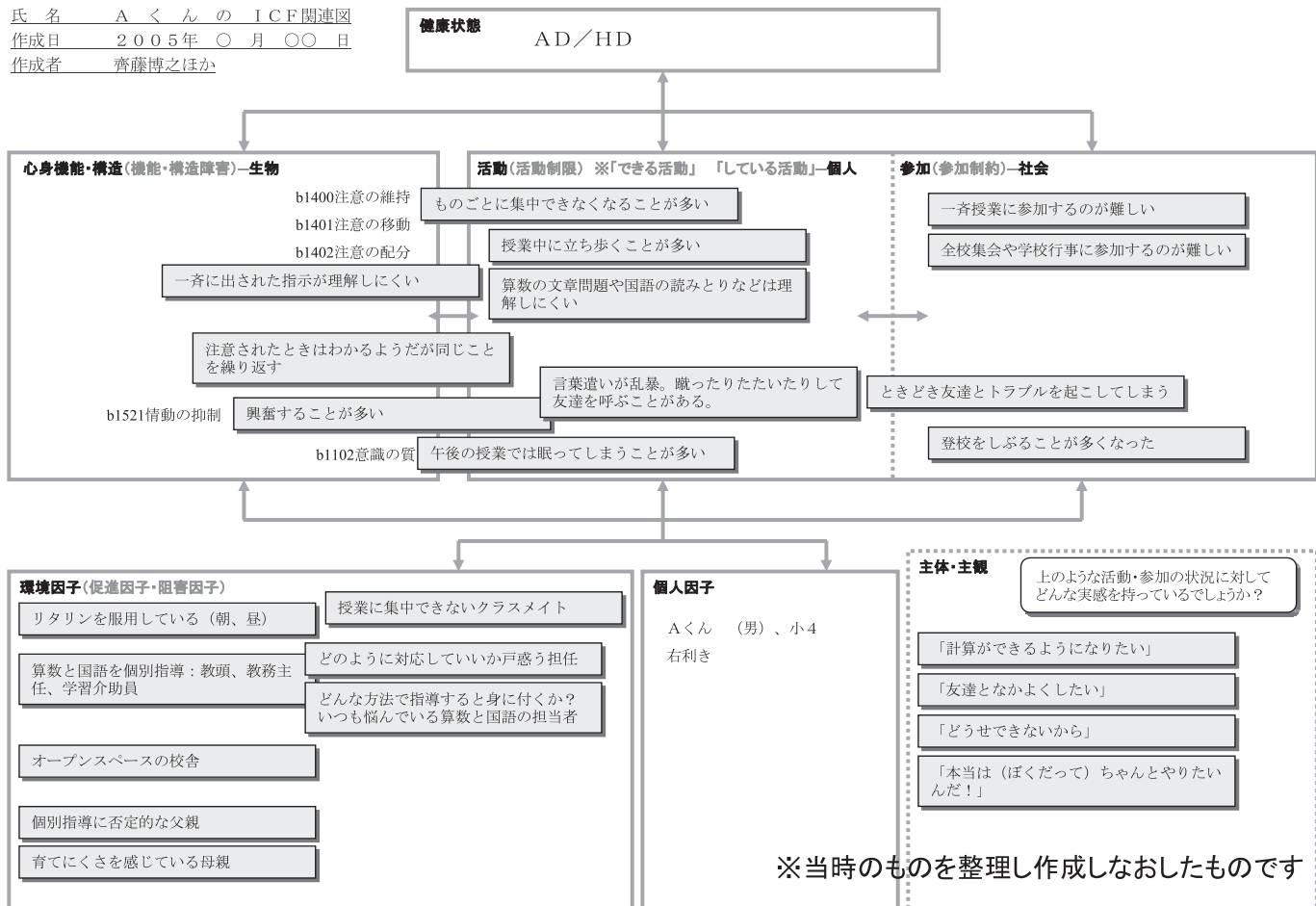


図1 ICF 関連図 (子ども理解シート)

氏名 A くん の ICF 関連図
 作成日 2005年 〇 月 〇〇 日
 作成者 齊藤博之ほか

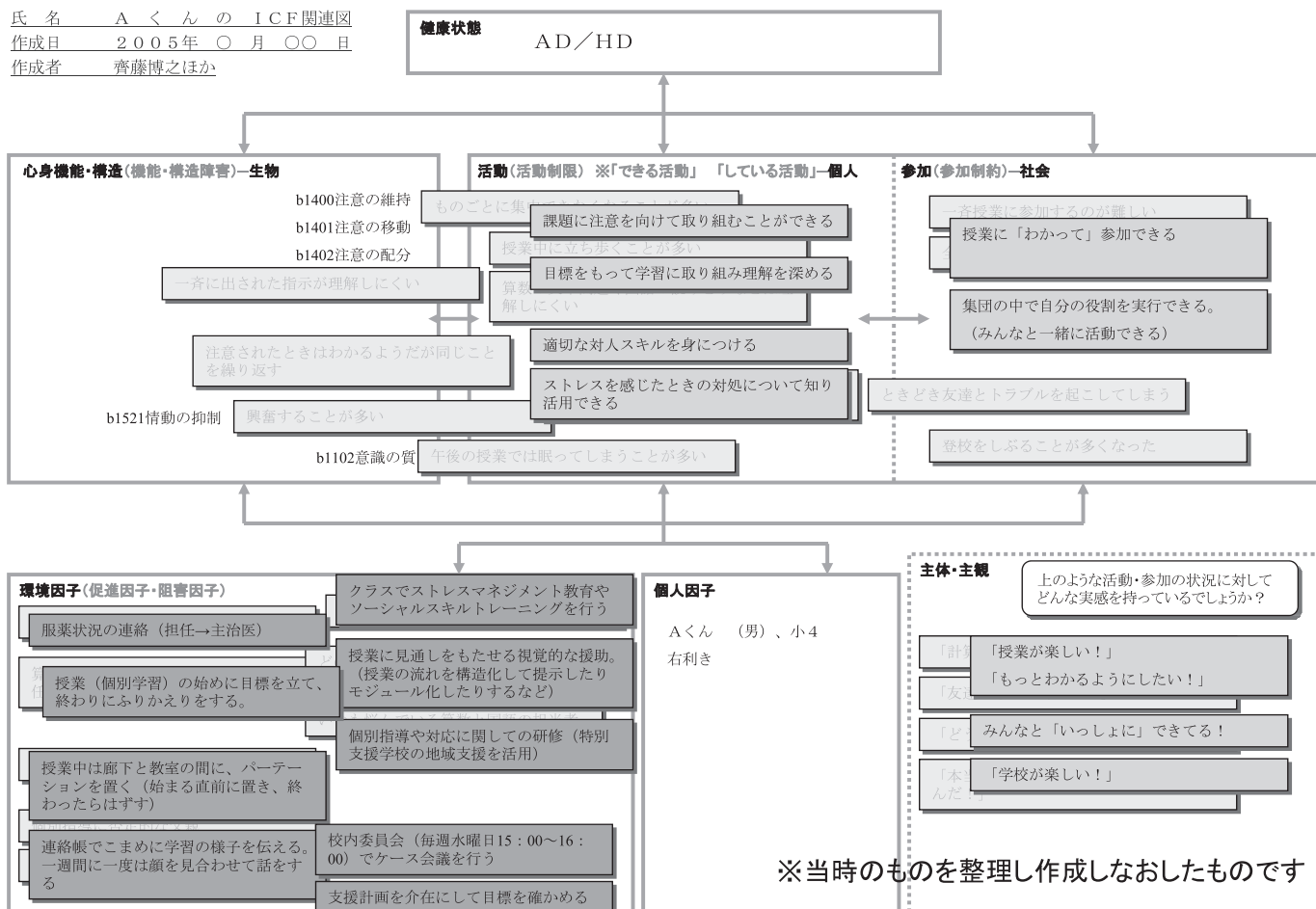


図2 ICF 関連図 (目標と指導・支援シート)